The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山形市方言における確認要求表現とその周辺
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2001, 3, p. 20-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23193
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第3号（2001年3月）20-32

山形市方言における確認要求表現とその周辺

渋谷　勝己

【キーワード】山形市方言、確認要求、ベ、ドレ、ンネ（ガ）

【要旨】

本稿は、山形市方言にある確認要求にあずかる形式、ベ・ベシタ、ドレ・デ、ンネ（ガ）について、その用法を、共通語の「だろう」・「(の) ではないか」のそれと対照しつつ記述することを試みた。その結果、ベは「だろう」と同じく知識確認の要求・命題確認の要求・強い見込みをもった確認の要求を表すが、ベシタは知識確認の要求のみを表すこと、ドレ・デは「ではないかⅠ類」と同じく驚きの表示・知識確認の要求・弱い確認の要求を表すこと、ンネ（ガ）は「ではないかⅡ類」と同じく推測と命題確認の要求を表すことを述べた。一方、ンネ（ガ）は聞き手の確認をとることを基本的な用法とすることなど、共通語とはまた別の特徴があることなどを述べた。

1. はじめに

本稿は、山形市方言にあるいわゆる確認要求を表す表現形式のうち、

(a) ベ・ベシタ（推量形式）

(b) ドレ・デ（指示詞）

(c) ンネ（ガ）（付加疑問文）

の３系統５形式の意味・機能について分析を試みるものである*。

問題の設定のありかたとしては、共通語の「(の) ではないか」と「だろう」に意味・機能的に相当する形式を取り上げたものであり、山形市方言において「確認要求」という意味・機能にかかわる形式を過不足なく取り上げて分析したものではない。したがって、基本的には確認要求を表す形式が確認要求を表さない場合や、確認要求を表すとはいいにくい形式（ドレ）を考察の対象とする一方で、確認要求にかかわる形式でありながら考察から除外した形式（ネなど）があることに注意されたい。

さて、本稿で取り上げる形式のうち、(a) の「ベ」はほぼ共通語の「だろう」に相当する形式で、基本的には推量を表す。「ベ」が確認要求に使われる場合、当該方言では、「ベ」とベシタの二つの形式で現れる（以下、用例は、焦点となる方言形式を中心に方言形式をカタカナで示し、他は漢字ひらがなまじりで記す。本文中で各方言形式に言及する場合には、「ベ」についてのみ、読みやすさを考慮してカギカッコに入れて示す。イントネーションは、下降調についてはとくにマークせず、上昇調のみ「↑」で記す。)。

(1) a　あそこのむかいに郵便局があるべ↑

b　あそこのむかいに郵便局があるだろう↑（共通語）

(2) あそこのむかいに郵便局があるベシタ

(b) のドレは、もともと指示詞だったと思われる形式であるが、融合してデになることもあり、すでに文法化が十分に進行していることがわかる。ドレの形で使われるときには文末詞ヤ（意味・機能についてはまだ分析を行っていない。以下「未分析」とする）が後接することがあるが、デの形では後接しない。

(3) あそこのむかいに郵便局がある｛ドレ（ヤ）／デ／？デヤ｝

(c) のンネ（ガ）は、もともと、共通語の「そうではない（か）」に相当する形式であり、(4) や (5) のように、応答詞や確認要求表現として単独で使われることがあるが、

(4) A　：君は学生か

B1：ンダ（そうだ）

B2：ンネ（そうではない）

(5) あれは雪だろう↑　ンネガ↑（そうではないか？）

一方では文末にあって、推測や確認要求を表す場合がある。

(6) a　もしかしたら太郎はまだ学生ンネガ↑

b　もしかしたら太郎はまだ学生じゃないか↑（共通語）

ンネ（ガ）のンは、単独で使われる場合には鼻摩擦音になることもあるが、文末にある場合には摩擦音化することはない。

以下本稿では、これら３系統５形式の意味・機能について、まず§2 で個々の形式ごとに記述を行う。そして§3 で、意味・機能が重なる場合の相互の類似点・相違点について検討することにする。

なお、本方言の確認要求形式については、三宅（1994）が「ではないか」の用法を分析することによって得た意味の枠とほぼ対応する分節のしかたが観察されるので、基本的に、表１に示す三宅の分類枠を参照することにする。表中、（ ）内は確認要求的な表現ではないもの、太字は用法に与えた名称（いずれも三宅による）、[ ] 内は渋谷の補記、< >内は三宅による特徴づけである。三宅（1994）では「ではないか」はカタカナ書きであるが、本稿では、共通語の分析であることを示すために、ひらがな書きに改めた。

また、本稿で採用した例文については、本文ではいちいち断ってはいないが、共通語の諸形式との対照が便利なように、田野村（1988）、三宅（1994）、蓮沼（1995）、安達（1999）のものに方言訳を与えたものが多い。したがって方言形はすべて作例である（筆者の居住歴については、渋谷 2001 参照）。

表１　共通語の「(の) ではないか」の意味（三宅 1994）

ではないか Ⅰ類	**(驚きの表示)** ＜知識・情報の驚きを伴った新規導入＞ (7) あれっ、雨が降ってるじゃないか
	知識確認の要求 ＜「だろう」で置き換え可＞ ［聞き手のすでにもっている］**潜在的共有知識の活性化** (8) あの太郎だよ。ほら、あのときいっしょに酒を飲んだじゃないか ［聞き手の］**認識の**［話し手のそれとの］**同一化要求** (9) そんなこと、太郎に言ってもしようがないじゃないか
	弱い確認の要求 ＜「ね」で置き換え可、認識的モダリティ形式に後接可＞ (10) そのスカート、きれいじゃない (11) 太郎もとうとう大学に入ったらしいじゃない↑
ではないか Ⅱ類	**(推測)** ＜推量の「だろう」よりも弱い見込み、Ⅱ類の基本的意味＞ (12) 太郎はいまごろ大阪に着いているんじゃないか↑
	命題確認の要求 ＜聞き手に、命題が真であることの確認を要求＞ (13) きみ、渋谷さんの奥さんじゃない↑

2. 用法

2.1. 「ベ」とベシタ

「ベ」は基本的に、共通語の「だろう」と同じ意味・機能をもって使われる。推量以外に、「知識確認の要求」(潜在的共有知識の活性化･認識の同一化要求)、「命題確認の要求」、「強い見込みをもった確認の要求」(「ではないか」に置き換え不可のため、表１の枠にはない。まとめの表２には示す) を表す。いずれも上昇調をとるが、「命題確認の要求」と「強い見込みをもった確認の要求」については、聞き手の確認をとるというよりも、話し手の判断を聞き手に伝達するという意図をもって、下降調をとることのほうが多い。

(14) ほら、むかし、デパートの前に郵便局があるケベ↑ (潜在的共有知識の活性化、ケは過去を表す)

(15) あそこに郵便局があるベ↑　そのかどを曲がって、(認識の同一化要求)

(16) おまえ、そこに行きたいんだベ {↑／↓}、本当は。(命題確認の要求)

(17) ここのラーメン、なかなかうまいベ{↑／↓} (強い見込みをもった確認の要求)

「知識確認の要求」については、以下の (22) の例のA2 のように認識を強く促すような場合以外には、「ベ」が下降調をとることはない。

(18) ＊そのことは、前に、おまえに言ったことがあるベ↓

またベシタも、

(19) 行き方はおまえにちゃんと教えたベシター

(20) (デパートから離れた場所で) デパートの前に郵便局があるベシタ。そこからちょっと行けば、

のように確認要求にあずかるが、その働きは、知識確認の要求に限られる。ベシターと長呼され、(とくに女性の場合) わずかに上昇するような音調で発音されることはあるが、明確な上昇調で発音されることはない。上の２例はいずれも潜在的共有知識の活性化の場合

であるが、認識の同一化要求の例には次のようなものがある。

(21) あそこに郵便局が見えるベシタ。そのかどを曲がって、

(22) A1：ここのラーメン、なかなかうまい {ベ／＊ベシタ}

B ：そうかなあ

A2：これぐらいだったらうまいほうだ {ベ／ベシタ}

(23) みんなが行け行けっていうから行ったベシタ。そしたら、

ベシタには、

(24) A：結局会議には誰が行ったの？

B：誰も行かないから私が行った {ベシター／??じゃない／行ったわよ}

のように、共通語の「ではないか」に置き換えると不自然な、聞き手や他者を非難するような用法もあるが、これも、基本的には「認識の同一化要求」に含めてよい。聞き手（他者）が実行してもよかったことを話し手が実行したと、聞き手に認識させることによって、聞き手を非難するニュアンスを帯びることになったものである。

なお、運用上の特徴としてベシタは、次のように、一度「ベ」で共有知識を活性化することに失敗し、再度活性化を試みるときに使われることも多い。

(25) A：デパートの前に郵便局があるベ↑

B：ないよ

A：あるベシター

「ベ」とベシタでは、ベシタのほうが要求する度合いが高いということであろう[1)]。

2.2. ドレ・デ

ドレ・デは、「驚きの表示」、「知識確認の要求」（潜在的共有知識の活性化、認識の同一化要求）、「弱い確認の要求」など、「ではないかＩ類」の表す意味と類似する意味を表す。ドレとデでは、用法上の違いはとくに見出せない（以下、ドレで代表する）。

(26) よう、山田だドレ（驚きの表示）

(27) あっ、そこにあるドレ（同）

(28) （写真を見て）なかなかよく撮れてるドレ（同）

(29) 自分から言い出したんだドレ（潜在的共有知識の活性化）

(30) 俺とおまえの仲だドレ（同）

(31) むかし家の前に白樺の樹があるケドレ（同、ケは過去）

(32) そこを見ろ。おまえの前にあるドレ（認識の同一化要求）

(33) A：今日は運動会あるかなあ？

B：（ほかの人が出掛けるのを見て）みんな行くドレ（同）

(34) なかなかうまいドレ（弱い確認の要求）

(35) おまえもだんだん世の中がわかってきたみたいだドレ（同）

しかし、ドレ・デは平叙文と共起するもので、常に下降調をとり、それが付いた文は疑問文とは言えない[2]。したがって、上昇調をとる「知識確認の要求」や「弱い確認の要求」の「ではないかⅠ類」に対応する用法は、ドレにはない。その用法を担うのは、「ベ」である。

(36)（小さい子に道を聞かれて）あそこにポストがある｛ベ↑／＃ドレ｝[3]

このようにして、ドレが「確認要求」を表すとすることについては問題があるのだが、本稿では、共通語の「ではないか」と対照するためにこの形式を取り上げた。

さて、共通語の「ではないか」とくらべたとき、ドレには、次のような特徴がある。

(37) 聞き手の気づいていない (a) 現実世界の個別的な事物や事態、あるいは、聞き手が一度は認識しているはずの、(a) 記憶のなかの具体的・個別的な事物や事態について、(b) 話し手が、聞き手にその存在を指し示し、認識を促す。

ここで大事なのは、

(38) 認識喚起の対象となる事物や事態は、聞き手の注意を喚起すれば、聞き手も、五感や記憶を活性化し、とくに説得しなくとも共有しうると話し手が考えるものであり、(c) 話し手が聞き手に一方的に押しつけるものではない

ということである。これらのことを確認するために、次の例を見てみよう。

まず、下線部（b）の聞き手目当て性ということについては、ドレ・デは聞き手の認識を促すという特徴をもつために、独り言では使いにくいということがある。

(39) ??なんだ、ここにあるドレ

また、ドレ・デには、ヨが下接しないといった、共通語の「ではないかⅠ類」とは異なる特徴もある。

(40) オレとおまえの仲｛じゃないかよ／＊ダドレヨ｝

これは、ドレが聞き手に対する伝達のありかたにもかかわるモダリティ形式であるからであり、ヨと同じ文法カテゴリに属するためである（他の文末詞との共起制限については、3.2 参照）。

次に、下線部（c）については、安達（1999：145f）があげる、

(41) A：何しに来たの？

B：おまえに会いに来たに決まってる｛じゃない／＊ドレ｝

(42) みんな行くんだから、私も行ってもいい｛じゃない／＊ドレ｝

のような、話し手（だけ）がもっている判断や認識を聞き手に押しつけている例では、通常の解釈では、ドレを用いることは出来ないということがある。表 1 に「認識の同一化要求」の例としてあげた次の例も同様。

(43) ＊そんなこと、太郎に言ってもしようがないドレ

三宅（1994）のあげる「驚きの表示」の例のうち、

(44) 会場には、ふろが付いていない部屋に浴槽を設置する業者らが待ち受けていて、

さかんに勧誘していました。しかも、驚いたことに当選者リストをもっている
ではないですか　(三宅の(21))

のような、すでに聞き手が確認できなくなっている過去の事態についても同じことが言える。

(45) 驚いたことに、そのとき太郎が現れた｛ではないか／＊ドレ｝

これらの例でドレが適格になるためには、たとえば (41) については、(46) のように、Bが来ることを聞き手も知っているという状況がなければならない。

(46) A：何しに来たの？
B：来いというから来たん｛じゃない／ダドレ｝

また、下線部 (a) の、ドレが、現実世界や記憶のなかの具体的・個別的な事物や事態と結びついているということについては、蓮沼 (1995) が「共通認識の喚起」「認識形成の要請」(三宅の「知識確認の要求」に当たる) としてあげる、次のような一部の例を見ることによって理解できよう。

(47) a　子供って、みんなカレーが好き｛じゃない／??ダドレ｝　(蓮沼の (9))
b　お宅の息子、カレーが好き｛じゃない／ダドレ｝

(48) a　仮に30人来るとする｛じゃない／＊ドレ｝　(同 (10))
b　明日は30人も来る｛じゃない／ドレ｝

(47a) (48a) の例でドレが使えないのは、上昇調を伴う「じゃない」に対応するドレがないということをおくとしても、いずれも、一般通念や、仮定的に構築された状況 (蓮沼 1995：393；403) のことを述べているからである。なお、次の例でドレが使えないのは、そもそも、喚起されるべき事物や事態を欠いているからである。

(49) 妻：遅い｛じゃないの／＊ドレ｝
夫：仕方がない｛じゃないか／＊ドレ｝。仕事が忙しいんだから。(蓮沼の (12))

ドレのもつこのような特徴は、おそらく、起源となったドレが、複数の事物や事態からの選択を表す指示詞であるということと関係があろう。ただし、指示詞のなかからなぜドレだけが選ばれたのかということについては、よくわからない。

2.3. ンネ (ガ)

ンネ (ガ) の意味は、「ではないかII類」によく対応し、基本的に、話し手の推測を表しつつ、聞き手から、命題内容が真であることの確認を得る形式だと言うことができる。(52a) のようにナアなどが後接する場合を除き、上昇調をとるのがふつうである。

(50) あの男が犯人ンネ↑

(51) 雨でも降るのンネ↑

ナアやノカ、「ベ」が後接すること、

(52) a　何かの間違いンネガナア

b　何かの間違いンネノガ↑

c　何かの間違いンネベガ

あるいは、

(53) 今テレビに映ったの、山田ンネケガ↑

のような過去の形（当該方言ではケ形）が用いられるといった統語的な特徴の面でも（田野村 1988)、ンネ（ガ）は、「ではないかⅡ類」と一致する。

一方ンネ（ガ）は、「ではないかⅠ類」の表す用法はもたない。当該方言でこの意味を表すのは、すでに論じた「ベ」・ベシタやドレである（(57) や (58) は、聞き手から命題が真であることの確認を得ようとする場合にはもちろん適格)。

(54) ＊よう、山田ンネ↑

(55) ＊だから言ったンネガ↑、行くなって

(56) ＊俺とおまえの仲ンネ↑

(57) ＊自分から言い出したのンネ↑

(58) ＊また次の機会があるンネ↑

(59) ＊なにをする。あぶないンネ↑

唯一対応するかに見えるのは、田野村（1988）が「ではないか$_1$」（三宅の「ではないかⅠ類」）の下位類とする、上昇調をとる「同意要求」の次の例であるが、

(60) また新しい店ができるって言う噂｛じゃない↑／ンネ↑｝

これは、山形市方言では、

(61) a　また新しい店ができるって言う噂だドレ（認識の同一化要求）

b　また新しい店ができるって言う噂だンネ↑（命題確認の要求）

のｂに相当するもので、聞き手に、命題確認の要求を行っている例である。

なお、ンネガに、ヤ（文末詞、未分析）やヨが後接した場合には、下降調をとって、厳しく詰問するような意味になるが、この場合も、聞き手に確認を求めていることには変わりがない。

(62) おまえが言い出したのンネガ｛ヤー↓／ヨー↓｝

(63) 少しは話を聞いてくれてもいいンネガ｛ヤー↓／ヨー↓｝

次に、ンネ（ガ）と「ではないかⅡ類」の違いということでは、次のような点をあげることができる。

まず、ンネ（ガ）が単独で用いられる（例 (4) (5)）ことを考えたとき、ンネ（ガ）の文末詞としての文法化の度合いは「ではないかⅡ類」よりは低く、付加疑問文としての特徴を多分に残しているということがある。たとえば先行する文が名詞文の場合、ンネ（ガ）は文にそのまま付加することが可能である。

(64) 太郎はまだ｛学生ダンネガ／ 学生$_\phi$ンネガ｝↑

その場合、「学生（だ）」とンネガの間にはポーズはないが、無形アクセント方言である当

方言であっても、ンで一度下がるという音調面での特徴から、まだ意味的な切れ目があることが確認できる。なお、この音調面での特徴は、動詞文や形容詞文でも同様に観察できることである。

2点目として、山形市方言では、ンネ（ガ）が文に直接後接できるために、ンネ（ガ）に先行する文が、ノダ文と非ノダ文で対立するということがある。

(65) A：太郎行ってくれるかなあ

B：たぶん行って<u>くれるφンネガ</u>↑（行って<u>くれるんじゃない</u>）

(66) A：太郎、なんで落ち着かないんだろう

B：また悪いことでも<u>した</u>｛<u>ンダ／ノ</u>｝<u>ンネガ</u>↑（<u>したんじゃない</u>）

3点目として、ンネ（ガ）は、文中に現れる伝聞形式ッタ（<トイッタ、未分析。文末の伝聞形式はド）や判断のモダリティ形式に後接するということがある[4]。

(67) あした、太郎がくる<u>ッタ</u>ンネガ↑（＊来るそうなんじゃない）

(68) あした、雨が降る<u>ミデダ</u>ンネガ↑（??降るみたいなんじゃない）

(69) 太郎が来る<u>ガモスンネ</u>ンネ↑（??来るかもしれないんじゃない）

また、4点目として、先に述べたように、ンネ（ガ）は、ナアやヤ・ヨ、ベガ（だろうか）のような文末詞を伴わずに用いられる場合には上昇調をとるのがふつうであり、その基本的な用法は、

(70)「話し手の推測」と「聞き手への確認」の両者を同時に表すこと

であって、ナアなどを後接した場合にのみ、「聞き手への確認」という意味要素が解除されるものと思われる。ンネ（ガ）が、ナアを伴わなければ独り言では用いられないこと、

(71) a　＊どうもあの男が犯人ンネガ↑

b　　あの男が犯人ンネガナア

また、思考動詞の補文では、ナアを伴って使われるのがふつうであることなどが、その根拠である。

(72) あの男が犯人｛ンネガナア／＊ンネガ｝と思って、あとをつけていった。

この点、三宅が、「ではないかII類」の基本的な意味が「推測」にあるとするのとは性格が異なる。ちなみに、山形市方言のンネ（ガ）にも、

(73) 太郎はそろそろ大阪に着いたころンネガ↑

(74)（山形にいて）こう寒かったら北海道は今日は雪ンネガ↑

のような、たとえ聞き手に確認を要求したとしても、聞き手が確認を与えることができないと、話し手がすでにわかっているようなことを述べる用法がないわけではない。しかしこの場合にも、聞き手になんらかの回答を要求しているという点で、話し手の推測だけを表しているわけではない。

以上をまとめると、山形市方言のンネ（ガ）の特徴は、次のようになる。

(a) ナアやヤ・ヨ、ベガが後接する場合以外には常に上昇調をとる。

(b) 聞き手から命題が真であることの確認を得るために使われる形式である。

2.4. まとめ

以上、ベ・ベシタ、ドレ、ンネの用法について、個々の形式ごとに述べたことを、ドレの用法を中心とし、共通語の「だろう」「ではないかⅠ類」「ではないかⅡ類」の特徴と比較しつつ整理すると、次のようになる。当該形式に当該用法がある場合には、「↑」＝上昇調、「↓」＝下降調として、音調をもって記した。

表２　各形式の用法一覧

形式／意味	山形市方言				共通語		
	ベ	ベシタ	ドレ	ンネ（ガ）	だろう	ではないかⅠ	ではないかⅡ
驚きの表示			↓			↓	
知識確認の要求	↑	↓	↓		↑／↓	↑／↓	
弱い確認の要求			↓			↑／↓	
推測				↑			↑
強い見込みをもった確認の要求	(↑)/↓				↑／↓		
命題確認の要求	(↑)/↓			↑	↑		↑

山形市方言の諸形式について補足すれば、次のようになる。

(a) 知識確認の「ベ」は、常に上昇調をとる。

(b) ドレ・ンネ（ガ）は、聞き手を必要とする。ドレは、ヨと共起しない。

(c) ドレは、具体的・個別的な事物や事態について、聞き手の認識を促す。また、話し手が聞き手に一方的に押しつけるものではない。

(d) ンネ（ガ）は、付加疑問文的な特徴をもち、ノダ文・非ノダ文、伝聞・判断のモダリティ形式にも後接できて、先行する文の制約が小さい。

3. 形式間の比較

さて、山形市方言の確認要求表現形式とその周辺形式について、表２のようにまとめてみると、「知識確認の要求」を表すベ・ベシタとドレ、「命題確認の要求」を表すベとンネ（ガ）の違いが問題になる。

最後に、この問題について検討してみることにしよう。

3.1. 命題確認要求のベとンネ（ガ）

順序が逆になるが、まず、命題確認要求の「ベ」とンネ（ガ）の違いについて検討してみよう。この２つの形式は、(75) のように、類似する意味を表すことが多いが、

(75) おまえ、本当は行きたい｛ンダ<u>ベ</u>／ノ<u>ンネ</u>↑｝

次のような場合には、命題確認要求の「ベ」とンネ（ガ）に適格性の違いが現れる。

(76) おまえ、急に顔色変わったけど、もしかしたら彼女に会いたい｛＊ンダベ／ノンネ↑｝

(77) なにか隠していることある｛ベ／＃ンネ↑｝　おれにはわかるぞ

(76)のような、その場ではじめてなされた、結論を出すまでの途上にあるような推測は、「ベ」によっては表されない。一方、(77) のような、話し手が結論をほぼ出しているような場合には、ンネ（ガ）は使用できない。この違いは、すでに、「ベ」の下降調、ンネ（ガ）の上昇調となって現れている。「ベ」を上昇調にした、

(78) おまえ、本当は行きたいんだベ↑

の上昇調は、単純な聞き手目当て性を表すものではなく、たとえば相手の言い訳や躊躇などに続いて発されるものであり、強い確認の意味が含まれている。ちなみに、上昇調をとった「ベ」を使えば、伝聞情報についても、聞き手にその内容を確認することができる。その場合、ンネ（ガ）は使えない。

(79) おまえ、抜け駆けしてひとりで行った｛ンダベ↑／＃ノンネ↑｝　あいつが言ってたよ

以上見たように、「ベ」とンネ（ガ）は、確信度をめぐる程度差の問題ではない。安達（1999 : 95）が「だろう」と「のではないか（＝三宅 1994 の「ではないかⅡ類」）」について指摘するように、そこには質的な違いがある。「ベ」は、すでに結論に近づいた話し手の推測を、聞き手に向かって確認する形式である。

3.2. 知識確認要求のベ・ベシタとドレ

次に、知識確認を要求する「ベ」・ベシタとドレは、

(80) a　みんなで芋煮会したケ｛ベ↑／ベシタ｝

b　みんなで芋煮会したケドレ

のように、置き換えられることが多い。

しかし、次のような場合には、違いが現れる（ベシタのことは、ここではおく）。

(81) a　なにをする。ぶつかるベナ（ぶつかるだろう、ナは文末詞、未分析）

b　＃なにをする。ぶつかるドレ（ぶつかるじゃないか）

c　（壁にぶつかると噂のある乗り物を見て）やっぱりぶつかるドレ。

(81a) はぶつからなくても言えるが、(81b) の「ぶつかるドレ」はぶつかっていないと言えない。

また、「鉛筆どこにある？」と聞かれたとき、その答えとして考えられる、

(82) a　机の上に（でも）あるベ↑

b　机の上にあるドレ

のうち、(82a) はたとえば風呂のなかから、実際に机の上にあることを確認しないで答えてもよいが、(82b) は机の上に実際にあることが確認できていなければ使えない。一見例

外に見える、次のような、未来の事態について言及する場合でも、

(83) A：あした釣りにでも行こうか

B1：あしたは雨だべ↑

B2：あしたは雨だドレ

の B2 の答えは、天気予報の情報などを、話し手がすでに確定した事実として捉えているのであって、反例ではない。

以上のような例に見られる「べ」とドレの違いは、「べ」がもともと推量を表すことと関係があろう。「べ」が確認の要求をする話し手の「知識」は、話し手の推量によってもたらされる知識でもよいが、ドレの要求する知識は話し手にとって確実なことでなければならない。

このような「べ」とドレの違いは、さらに、「驚きの表示」にはドレしか使えないということもあわせて説明する。驚きや発見が起こるためには、驚きの原因や発見の対象となった事実を実際に確認していなければならない。

べ・ベシタ・ドレの間にはそのほかに、次のような、念押しのズ（渋谷 2000）との共起制限がある。

(84) みんなで遠足に行ったケ｛ベズ／＊ベシタズ／＊ドレズ｝

ベシタやドレには、すでにズと類似する念押しの機能が埋め込まれていると考えられるであろうか。関連して、「べ」は丁寧語のス（渋谷 2001、本誌所収）と共起することがあるが、ベシタ・ドレにはそれがないということもある。

(85) お宅が言い出したんだ｛ベッス／＊ベシタッス／＊ドレッス｝（お宅が言い出したん｛でしょう／じゃないですか｝）

その他、知識確認要求の「べ」が常に上昇調をとることと関連して、

(86)（小さい子に道を聞かれて）あそこにポストがある｛べ↑／＃ドレ｝

のような場合、ドレが不適切になることは、2.2 で述べた。

4. まとめ

以上本稿では、山形市方言で確認要求表現に使われる形式のなかからべ・ベシタ、ドレ・デ、ンネ（ガ）を取り上げて、共通語の「だろう」「（の）ではないか」と対照しつつ、その意味・機能を整理した（§2、まとめは 2.4 の表２に示した）。また、意味・機能的に類似する、命題確認要求のべとンネ（ガ）（3.1）、知識確認要求の「べ」・ベシタとドレ（3.2）を取り上げて、その違いを考察した。

また本稿では、三宅（1994）が示した意味の枠を採用し、それにしたがって分析を進めてきたが、その枠組みだけでは、山形市方言と共通語の確認要求表現にあずかる諸形式の分節のありかたを、通体系的に把握することはできないことを見た（2.4、表２の補足等参照）。

本稿の分析結果を踏まえつつ、山形市方言の確認要求表現形式を当該方言のモダリティ体系全般のなかに位置づけること、あるいは、モダリティ表現について、複数の方言を対照的に、あるいは言語地理学的に考察するための通体系を構築していくことが、今後の課題である。

【注】

* 本稿は、平成１２年度科学研究費補助金（基盤研究（B）(2)、研究課題番号 10410097）「文法体系のバリエーションに関する対照方言学的研究」（研究代表者、大西拓一郎）によるものである。

1) ベシタのシタは、「ベ」以外には、疑問のカにつくことがある。

(1) 彼が行くこともあるカシター

cf. 彼が行くこともあるカ

この場合も下降調をとり、疑問を表すことはない。納得等、命題がすでに話し手に定着しかけていることを表す。

(2) あー、ンダガシター（そうか）

(3) あー、あれが蔵王だガシター（蔵王か）

2) 「ではないか」に問いかけ性がないことを支持する現象として安達（1999:147f）があげる３つの現象のうちの疑問文における二人称への転換は、ドレについても言える。

(1) ＊（君は）コーヒーが飲みたいドレ

現象のほかの２つである、「なんだ」との共起と、「よ」との共起・人称の転換に関連しての「てもいい」との共起の問題については、本文参照。

3) いくら言っても探せないというときには、

(1) なに言ってるの、あそこに見えるドレ

ということが可能である。とくに、現場の対象について認識を喚起する場合には、

(2) A1：あそこに郵便局があるベ？

B ：ないよ

A2：ある｛??ベシター／ドレ｝。あそこだよ。

の A2 では、本文（25）のベシタ（記憶にある共有知識の喚起）と異なって、ドレのほうが適切になる。これも、後述する、ドレの現場指示的な性格を反映するものであろう。なお、「じゃないか」が上の A1 では使いにくいことについては、安達（1999：176）にも指摘がある。

4) なお、２点目、３点目としてあげたことは、「ベ」・ドレにも当てはまる特徴である。ベシタについては、「みたいだ」とは共起しにくいように思われる。

【参考文献】

安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

渋谷勝己（2000）「山形市方言の文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2

――――（2001）「山形市方言の丁寧語ス」『阪大社会言語学研究ノート』3　（本誌）

田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152

蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為―『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法―」仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお出版

三宅知宏（1994）「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1　大阪大学文学部日本語学科現代日本語学講座

しぶや　かつみ（大阪大学大学院）

sbj@let.osaka-u.ac.jp